



学校だより

第 63 号 平成 24 年 5 月 31 日

キャリア教育 (9)

副校長 渡邊昭宏

人は誰でもこの世で果たすべき役割をもって生まれ、その役割を果たしながらこの世を去っていきます。しかしそれを本人が意識するのはとても難しく、役割を気づかせたり意味づけたりするのは周囲の人々の力にかかっているといってもよいと思います。「生きている意味(価値)がない」などと思ってしまうのは、いろいろな場面で実際は果たしている役割や必要とされていることに本人自身が気づかなかったり、周囲の人々にねぎらわれたり褒められたりした経験が少ないからだと思います。

子どもが見せる笑顔はそれだけで周囲の人々を和ませ会話をはずませる宝物です。東日本大震災のときに失意の人々を励まして生きる勇気と元気を与えたのは、あどけない子どもたちの笑顔と歓声だったと言われています。普段だと子どものはしゃぎ声は「うるさい」と制止されることの多い対象ですが、暗く沈んだ雰囲気ときは正反対の評価をされます。また、赤ちゃんが歩き始めたり話し始めたりした頃はみんなから喜ばれても、そのうち歩き回ってどこかへ行ったりおしゃべりが過ぎると冷たい言葉を浴びせられます。このように同じ行為でも時や場所や場面(TPO)によって、周囲の人々からの意味付けや価値付けが大きく違ってきます。そうした評価を本人が理解できないと、「話ができること」「自分で行動できること」自体はいいことなのに、空気が読めない(KY)とか、指示が入らないといった「人間関係形成」に大きく影響する二次的な障害になってきます。

日常生活を営んでいると人にはそれぞれの場面で「期待される役割」「果たすべき役割」が生じます。毎日している「朝の会」でも日直の日とそうではない日では役割が違います。そして朝の会が終われば今度は次の授業のなかで求められる役割をこなさないとなりません。スクールバスの中でも走行中は静かに座っててもらわないといけません、到着したら今度は立ちあがって降りてもらわないといけません。このように「役割(すること)」は刻々変化していくので、それに対する理解が難しいときは、写真カードやスケジュールボードなどを使って(情報活用)流れの見通しをもたせて心の準備をさせて(将来設計)から気持ちを切り替え(意思決定)させていきます。

役割というと「分担した仕事の一部」というイメージが強いのですが、キャリア教育では、お子さん一人ひとりの、その時、その場所、その場面における行為すべてが意味をもっているととらえて、それがふさわしい行為なら、励ましたり、褒めたり、一緒に喜んだりして、満足感・充実感を味わわせ、次も頑張ろうというやる気・意欲につなげていきます。そしてそれを繰り返すことによって集団の中で受け入れられ必要とされているという「自己肯定感」「存在感」をはぐくみ、「他者への気遣い・思いやり」や「相手の立場にたった行動」といったより高度の人間関係形成能力の育成へと進めていきます。